

---

# 運命のベンチ

N澤巧T郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命のベンチ

### 【著者名】

澤巧一郎

N5945E

### 【あらすじ】

ある小説家が、いきなりベンチを家の前に置くことを思つぐ。

「」は閑静な住宅街。駅でタクシーに乗り、「」の名前を言つと「縁があつていいところですね」と、運転手が言つような、自然あふれるみどりの街。

そんな道を歩くのは、出版社に勤める編集者。「」のあたりに自宅を構える先生に、原稿の催促に来たご様子。

先生の自宅にある2階の書斎からは、家の前の道路が一望できるようになつていて。編集者が来たのが、一目でわかるようにそんな構造にしたのかどうかは定かではないが、家を訪ねると留守だということがよくある。

どうせ今日も出でくれないと想いながら、編集者は家の前へやつてきた。

チャイムを押すとすると、思いもよらず玄関の扉が開き、先生の姿が現われた。

編集者は驚きながら先生に語りかけた。

「先生。なにをしていらっしゃるのですか？」

普通ならここで挨拶を交わすのが普通だろうが、どう見ても挨拶を省略しなくてはいけない場面だった。なぜならドアから出てきたのは先生だけではなかつたからだ。

「見てわからないのか？」

編集者は正直に、目の前に広がる光景を言葉にした。

「ベンチを運んでいますね」

「そうだ。わかつてゐるじゃないか」

ベンチを運んでいるのは小学生だらうとアメリカ人だらうとわかることだ。しかし、何故そんなことをしているのか、編集者はまつたく答えを見出せなかつた。

「・・・・・」

何も出来ずにただ呆然と立つている編集者。それを見かねて先

生、

「なにをしてる。わざわざ手伝つたらどうだ」と、注文をつけた。

「ああ、申し訳ありません。よしよし」

編集者はなぜ自分が謝ったのか、一瞬疑問に思つたが、それは、今朝みた夢のようにすぐに忘れてしまつた。

「そこ、気をつけて。上げすぎだ。もつと下げて。よし、ここにいらに置こう。よしよし」と、「ふう」

先生は一仕事終えたみたいにベンチにどかっと座つた。そして、編集者はここに来た目的を思い出した。

「先生」

「なんだ? 疲れただる。君も座つてみたりひとつだ」

「原稿をいただけないでしようか。締め切りが」

そういうと、先生は大きく胸いっぱいに空氣を溜め込んでから口を開いた。

「はあ――……。これだから今の都会の人間はいかん。口を開けばやれ時間だの、やれ締め切りだの。いかんぞ時間に支配されるようでは。時間とは人生を豊かにしてくれるひとつペースだと語つこと自覚せにゃならん」

先生はよく、いかにももつともらしい言い訳をする。よくもまあポンポンと出てくるなあと、感心することもあるが、まあそこは小説家として当たり前と言つものなのだろうか。

「先生、その時間を有効に使つているのなら、原稿がとっくに出来ていてもおかしくないこと思つのですが」

締め切りはとっくのとうに過ぎてゐるのである。いじは編集者の方が一枚上手だったようだ。

「……しょうがない。はいはい書きますよ。まつたくせつかちなんだから。こんなに催促されたら書けるものも書けなくなる」

少々いじけながら先生はベンチを立ち、自宅へと戻つていく。

「先生」と、編集者が思い出した様にかばんの中身を手で探りながら話しかけた。

「今度は何だ。書くつて言つてゐだらうに。そんなにせかすな」  
「この前いただいたのボソです。つまらないです」

原稿を片手に持ち、先生のほうを見る編集者。先生は振向いてまたなにか言い訳を考えているように思われた。それがいつものやり取りだからだ。

しばらくして先生が言葉を発した。

「…………ま、そつだらうな」

そのまま先生は皿の中へ戻つていぐ。

少々拍子抜けしてしまった編集者は、わざと回じよつて呆然と突つ立つてしまつた。

びうしたのだらう。なにかいつもと少し変だ。  
そう思った矢先、玄関から「ガチャツ」と鍵のかかる音が飛び込んできた。

現実に引き戻された編集者は、さつきの心配なびびりへやら、ドアをたたきチャイムを鳴らして先生に入ってくれるよつ頼むのであつた。

平日の昼間から青年が一人電車に揺られていた。

空席もところどころ見受けられるが、そこには座らす人に、ドアのところに寄りかかって外を見ている。

遠くのほうをボーっと見つめている彼は、電車のゆれに抵抗することななく、ゆらゆらと揺らいでいる。

ドアが開き、ゆっくりと地面に足をつけた。

駅を出ると左右を2回ずつくらい確認して、ゆっくりとあたりを見渡しながら歩いていくのであった。

「あら、編集さん。びうしたのそんなどひに座つて  
「ちよつと締め出されまして……」

かれこれ一時間経つただろうか。編集者はベンチに腰をかけて待っていた。その時、考えていたことはいうまでもなく、「このためのベンチか……」というものだった。

そんな時、先生の奥さんが帰ってきたのだ。

「もうあの人つたらいつもこうなんだから。なんでいつもこう意地悪するんでしょうね。待つてくださいね、いま開けますから」

部屋には入れたが、書斎の扉は硬く閉ざされているのであった。「ちょっとあなた。編集さんが来てるのに鍵を閉めて。かわいそうじゃありませんか。あなたのために来てくださいっているのに。聞いてるんですか？」

「そんな、大丈夫ですから奥さん。待つてますからお気遣いなく」「あら、そうですか？ それでも悪いわよ。あ、そうだ。いま買つてきたドーナツがあるの。一緒にいただきましょ。それがいいわ。あの人には内緒で」

コーヒーのほろ苦さと、ドーナツの甘さを味わいながら、奥さんの話を編集者は時々相づちを打ちながら聞いていた。

「最近あの人元気がないのよねえ。前からしゃべる人ではなかつたんだけど、最近はホントに口を開かないのよ」

編集者は思い出していた。原稿がボツだと書つのに反論しなかつた先生のことを。

「なんだか最近はひらめくことも少なくなっちゃったみたいだし。今までなんて何か良いストーリーが思い浮かんだら、何をしててもすぐに書斎に入つて黙々と書いてたのよ。お風呂に入つてたときは大変。体も拭かないし服も着ないでしょ。もつお風呂から書斎の廊下がびしょびしょなんだから。それが近頃は駆け足で書斎に入るところなくなつたのよ。いつたいどうしちゃつたのかかしら」

ほとんど一息でしゃべつた奥さんはコーヒーを一口飲んだ。  
編集者はふと窓の外に見えるベンチに目をやりながら、コーヒーを一口飲んだ。

そして、『ふー』と、一人で息を吐いた。  
かすかにコーヒーのにおいがした。

あたりを見回しながら歩く青年。

時々立ち止まり、ポケットから、雨にぬれたよつこシワシワな、一冊の本を取り出して読んでいる。

そして、本を閉じると再びゆっくりと歩き出す。

すると、田の前から編集者が、奥さんからいただいたお茶菓子を原稿の代わりにぶら下げてやつてきた。

二人はすれ違う。

目をあわせる事もない。

当たり前のことだ。

書斎の中で、先生は背もたれにもたれて、ギーゴギー「」と音を鳴らしたり、ぐるぐるイスを回したりしていた。

先生はなおも、肘掛にひじを置いて、あごひげをジョリジョリ言わせたり、大きくひとつため息を吐いたりしている。  
そして思うのだ。

何で私は書くのだろうか。

今までの私はどうだった？

なぜ書いていた？

なにか作り出すことが楽しかったような気がする。

だれも考え方がない物語。

現実の世界では起こるはずのない奇跡を作り出す。  
確かにそれは面白い。

ただ、それだけなら誰かに見せる必要もないはずだ。

締め切りだつて、なくても良いじゃないか。  
私が作つて楽しければ、それで良いじゃないか。

ふと、外のベンチに田をやると、一人の青年がいつの間にか座つて  
いる。

「お、釣れたか」と、先生は少々身を乗り出してベンチに座る青年  
を観察しはじめた。

しかし、一向に動こうとしない。

ボーッと畠を見上げ、時々キョロッと左右に田をやることがあるが、  
ほとんど同じ姿勢だ。

先生は再びジヨリジヨリ音をさせ始めた。

飽きはじめている証拠だ。

しばらくして、先生は重い腰を上げ、ゆっくりとドアの鍵を開けた  
のだった。

なんなんだあいつは。

さつきから微動だひとつせんではないか。

編集が嫌がらせに人形でも置いて帰つたか？

ボーッと何をしとるんだかあいつは。

なんか面白いやつが来ると思つて置いたんだがな。  
うーん……。

……しかしだ。

普通じやないことは確かだ。

それは面白いといふことだ。

先生は、一步、また一步とベンチへと近づいていく。  
青年は相変わらずボーッと一点を見つめている。

ベンチの横に先生が着いた。

青年もやっと気配に気づいたのだろう。  
ゆっくりと先生に顔を向けた。  
するどいだらう。

青年はまるで石像にでもなったかのように、先生の顔を見たまま固まってしまったのである。

声をかけようと思っていた先生だが、そんなに見られていては調子が狂つてしまふ。

先生も黙ってしまった。

しばらくすると青年のほうに動きがあった。  
いままで開けているのか瞑っているのかもわからなかつた目が、まるでネズミを見つけたフクロウのように開眼したのである。  
おもわず後ずさりしそうになる先生。

(やばい奴に近づいてしまった)

そう思った矢先、再び青年の様子が一変した。

顔の眉毛がへの字に曲がり、口は震え、顔は紅潮し、瞳にはあふれんばかりの涙が蓄えられていった。

先生は「大丈夫か」と、声をかけようとした。しかし、「だ」と、言葉を出しかけた瞬間に青年がいきなり立ち上がつたのだ。  
そして、右手と左手と、手のひらと甲を使って涙をぬぐう。  
体を震わせながら、声を漏らしながら、涙は枯れることを知らない。

先生はあまりの泣き声に止まらずに立っていました。

青年は大きく息を吸つたり吐いたりして息を整えようとしました。

そして、青年は擦り出すようにして一言だけ口にしました。

「ありがとうございました」

いつこの本を手にし、なんで読んだのか。

今は思い出すことが出来ない。

ただ、その時、僕はいつものように電車に乗つて、会社から家に帰つていた。

別に最初から期待なんかしてなかつたけど、予想通り社会と書いつのはとてもめんどくさくてつまらないところだった。

通勤時間が倍に伸びて、あまりにも暇だったからだろうか、本を読もうなんて思つたのは。

新人研修で「何か本を読め」と、言われたからじゃないことは確かだ。

そう、確かにことは、僕は本を読み、たくさんの乗客の顔も気にしないで泣いたということが。

泣いたところです。

泣いたということ。

一言一言が胸に突き刺さつた。

心に響き渡つた。

ぼやけきつた視界で、僕は必死になつて一文字一文字を脳に送り込んだ。

そのたびに心の泉からあふれ出る涙。

涙。

涙。

この感動を味わうために僕は生まれた。

この感動を味あわせるために両親は僕を生んだ。

世界が変わつた。

いや、

この本が

世界を変えてくれた。

その本を書いた人のことを知りたくなつた。

今、僕はその人の育った街の中にいる。

「Jの墨色を見て、Jの空氣を吸つてJの本を書いた。

そう思いながら、僕はベンチに座り、とても穏やかな気持ちになつていた。

ふと、人の気配を感じて横を見ると、その人は立っていた。

立っていた。

立っていた。

な  
.  
.  
.  
?

↑  
?.

なんだこれ？

意味がわからない。

わけがわからない。

目の前には、生きてきて本当によかつたと思える感動をくれた人。  
両親が僕を生んでくれて、育ててくれて本当によかつたと思える感  
動をくれた人。

・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・

全身からあふれる涙。

涙。

涙。

感情が全身を突き抜ける。

駆け巡る。

はじけ飛ぶ。

伝えなくちゃ。

僕は立つた。

言わなくちゃ。

言わなくちゃ。

書いてくれて。

生まれてくれて。

生きててくれて。

出合つてくれて。

本当に

『ありがとうございました』

ガチャツ

ダッダッダッダッダダダッ

「あなた。廊下を走ると転びますよ」

バタンツ

「なにか、久しづりにいい話でも思いついたのかしら」

そうこうと、奥さんは「そうだとしたら」と、何か思い出したかのように席を立ち、玄関へ続く廊下へ出た。

「あつ、やつぱり。けょっとあなた。廊下が砂だらけじゃないの」

砂の感触をスリッパ越しに感じながら玄関へ進む。

「まつ、靴がないじゃない。ちゃんと靴を脱いでからあがつてくださいな。アメリカじゃないんですからね。あなたつ。聞いてるの？」

あなたつ

2階にある書斎の扉は硬く閉ざされていていた。

「ほんと、しょうがない人ねえ」

そういうながら、ほうきとチリトリを持つて廊下の砂を取りはじめ、集めた砂を捨てるためにドアを開けた。

「そういうえば、このベンチはなにかしら。さつき編集さんが座つたけど・・・・。そうだ、編集さんに電話してあげましょ。もうすぐ出来ますって」

そう言つて奥さんは家に戻つていいく。

バタンッ

本当に出来上がるのかなあ。思いつけば早いけど、思いつくかが問題だからなあ。こんな短時間で先生の調子が回復するとは思えないんだけど。

編集者を乗せた電車は再び駅に止まる。

ドアの向いには、目を赤くした先ほどの青年。

プシュー

一人はすれ違う。

目があわせることもない。  
当たり前のことだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945e/>

---

運命のベンチ

2010年10月21日20時13分発行